

JELA NEWS

ジェラニュース 第8号 2005年11月1日発行 発行責任者 ローウェル・グリテバック

日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp 口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団

難民支援 ・ アジア子ども支援 ・ ブラジル子ども支援 ・ ボランティア派遣 ・ 奨学金制度 ・ 宣教師支援

社会に出ていき 手をさしのべる

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、
旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」
マタイによる福音書 第25章35～36節



GROUP WORK CAMP 2005

グループ・ワークキャンプ2005 Living Inside Out (内にある良さを外にあらわして生きる)

全米各地とその周辺地域で30年近く実施されている超教派の催し、グループ・ワークキャンプ。JELAは日本福音ルーテル教会と協力して、5年前から日本の青少年をこのキャンプに毎年派遣しています。今夏は15名の若者がミシガン州で2週間の貴重な体験をしてきました。同州には短期宣教師ケリー・リッチ・ナルミ姉の母教会・King of Kingsルーテル教会があり、教会員

宅でホームステイを楽しんだ一行は、高齢一人暮らしや貧困家庭の家屋修繕奉仕キャンプに一週間たずさわり、8月上旬に無事帰国しました。400名の米国の若者と昼夜を共にするこのキャンプで日本の若者は何を感じたか。2ページ以下のレポートをお楽しみください。来年の募集内容については5ページをご覧ください。

この号にはこんな記事が

グループ・ワークキャンプ2005詳細報告と写真集	2～5
グループ・ワークキャンプ2006募集要項	5
難民支援	
我が国における難民認定制度について(落合智昭)	6
書籍紹介「ほんのすこしの勇気から」	6
ジェラハウス利用者からの感謝状	7
30名の大学生・社会人がジェラ・ミッションセンターを訪問	7
支援者の皆様へ(ローウェル・グリテバック)	8
リフレカリアが「祈りのたて琴」2006年度研修講座・募集要項	8
個人情報取扱について	8
支援者一覧	8
編集後記	8
<折込特集> ブラジル子ども支援	
支援施設の近況/石丸哲平兄の働き/子どもたちの写真	

グループ・ワークキャンプ2005

Living Inside Out (うちにある良いものを外にあらわして生きる)

<キャンプをとおして変わったこと>

●初めて気づいた神様の愛の大きさ

下川正人・市ヶ谷教会(14歳)

5回目の夜のプログラム。この夜のプログラムは僕にとってはかなり衝撃的なものでした。僕にはよく分からなかったのですが、今回のプログラムは祈ったり、ごんげしたりするコーナーが4つほど設けられて、それぞれを回って、最後に体育館の中央のあたりにある、十字架の前に座って、気が済んだら各自解散というものであったと思います。ごんげコーナーで僕は今まで自分が行ってきた悪い行為を思い出せる限り思い出そうとしました。はっきりいって、その時点では果たして赦されることなのだろうか、と不安になってしまいました。最後に中央の十字架の前に座り込み、十字架を見上げました。すると大粒の涙がポロポロと出てきて、止まらなくなってしまったのです。こんなに悪い行いをした人間が、この地球上で生きて、呼吸をしているという事実に気づかされたのです。実に不思議なことです。こんな自分が、生きているという事は、生かされてきたのです。キリストの死と復活と罪の赦しによって、生かされてきたのです。天におられる神様に守られながら、生かされてきたのです。神様の本当に大きな愛に今はじめて気づかされたのです。人のために我が子の命を捨てること、これが神様にとってどれほどの犠牲であったかは計り知れませんが、けれども神様は僕たちを愛しているからこそ、最大の愛を示すために、最大の犠牲を払ったのです。そのことに僕は気づいたのです。震えるほどの感動とはまさにこのことです。目の前の十字架の大きさが、実際には僕の身長2倍くらいでしたが、十倍にも百倍にも千倍にも大きく見えました。神様、ありがとう。このキャンプによって何が変わったかといえば、全てが変わりました。僕はこのキャンプを通して初めて本当のクリスチャンになれた気がするのです。心の中でどこか遠い存在に感じていた神様がこんなにも身近な存在であるということに気付かしてくれたのはこのキャンプなのです。

●感謝の気持ちをあらわす

上村知世・熊本教会(16歳)

私はこのキャンプに参加して、一番自分が変わったなあと思う事は、人の優しさに気が付く事ができるようになったという事、そして感謝の気持ちを持てるようになったと思います。それは日本に帰ってからと同じで、アメリカへ行く前とは違うなあと自分でも思うほどです。しかしその感謝のきもちは言葉や行動で表さないといけないと思います。私はそれが不十分なのでこれからの課題にして行こうと思っています。

* 帰国後の知世さんの様子について、お母様から次のような便りが届きました。「最近、娘が家族に対しても相手の気持ちを大切に声をかけたりしてくれるようになった様に感じま

す。言葉の一言にも、励ましたり、感謝の気持ちを届けたりと、相手に勇気ややさしさを与えてあげられる事をしっかり受け止める事ができたような気がします。今回お世話になったスタッフ、ホストファミリー、そして仲間へ感謝です。彼女をたくましく成長させて下さった神様に感謝の気持ちでいっぱいです。」(上村理恵)

●私も愛されている

木村日末子・西宮教会(19歳)

自分から愛する事、気にかける事や祈りに覚える事は今までにもあった。むしろ私の道徳感の中に人に何か奉仕をすること何かする事、一種の自己犠牲的な他己主義ともとれるような気持ちがベースにあった。だが、愛する事はあっても愛されることは無いのだと思い込んでいたせいで気持ちの一方通行になっていたのではないかと思う。だがこのキャンプを経た今は違うと言いきれる。私は愛する人であり愛される人なのだ。

●脇役から主役へ

小林恵理香・大岡山教会(引率)

ワークキャンプの主題聖句であるガラテヤ書5:22-23で、goodnessという単語は「善意」と訳されている。しかし、キャンパー達の笑顔を見ていたら、ワークの場で分かち合われているものは、実際の労働だけでなく、「他者のために働く」という善意だけでなく、一人一人の「良さ」なのではないか、と思えてきた。それぞれが自分に与えられている聖霊の実を分かち合うことでワークを実現させている以上、私も脇役や裏方ではいられない。私こそ主役になって学び、恵みを受けていなければならぬ。そうでなければ、私はほかの人に自分のgoodnessを与えることはできないし、みんなが日々提出するジャーナルに書いて返すメッセージだって生まれないのだ。そう考えたとき、私のキャンプへの関わり方が変わった。私は声をかけるだけでなく、キャンパーと共にウォータークーラーやクーラーボックスを運んだ。一人で重いウォータークーラーを運ぶ心細さやつらさを味わった。炎天下でペンキ塗りをし、刷毛から落ちるペンキを腕に浴びた。ワークサイト(=奉仕作業の現場)でのデボーション(=祈りと交わりの会)に参加した。夜のプログラムも通訳として走り回るだけでなく、キャンパーと一緒に祈り、考えた。だから、みんなが持っているgoodnessが見えた。一人一人の存在が共に働く仲間にとってどれだけ大切なものか実感できた。「ありがとう」という言葉が、元気な笑顔が、黙々と働く姿が、どれだけ周りを励まし、よい影響を与えているかが分かった。

<支え、励ましあうことの大切さ>

●私は神様とつながっている!

谷口真実・松本教会(16歳)

ワークキャンプ初日、私は泣いてばかりの一日

でした。なぜかという、クルーメンバー(=同じ家を修繕奉仕する6人の仲間)の人たちの中で孤独を感じたからです。コミュニケーション(=意思疎通)のとり方が分からず、ワークの最中私はずっと一人でペンキ塗りをひたすら続けました。ペンキ塗りが終わり、次にやりたい仕事があっても自分から話しかけることが怖くて、できないままでした。そんな自分が悔しくて情けなくて泣いてしまいました。そのとき、日本から来た仲間が祈ってくれました。「私達は、一人じゃない。みんな神様につながっているんだ!」という内容でした。その祈りは、私にとってこの一週間のワークキャンプで大きな支えとなりました。その言葉を聞いて、私は神様とつながっているんだ!と神様の存在を強く意識するようになりました。夜のプログラムで神様と話す時間、賛美歌を歌う時間が一杯ありました。神様を信頼する心、自分を支えてくれている大切な仲間がいること、めげない強い気持ちを持つなど、大切なことに気付くことができた一週間となりました。大きく自分が成長したと思います。

●支えの美しさ

大柴麻奈・武蔵野教会(16歳)

私がこのキャンプで学んだのは信仰だけではなく、英語だけではなく、支えだ。私は支えられなくては生きていけないし、支えなくてはきっと生きていけない。支えとは本当に美しく、素晴らしい。私が風邪の時、声をかけ、私のために動き、ジュースをおごってくれたり、ケアカード(=励ましの手紙)を書いてくれたり、目を合わせて笑いかけてくれたり、どれもすべて嬉しかった。

●仲間への気づかい

大和由祈・大岡山教会(16歳)

二回目の参加は、予想以上に精神的余裕がありがたかった。クルーと対面したとき、去年は自分のこと一杯々々だったが、今年はクルーの人たちを見る余裕があった。私たちも緊張しているけど、緊張しているのはアメリカ人も同じだっていうのが分かった。会話にはあまり参加できなくても、一週間この六人で神様に奉仕するトキを持つのだから頑張ろうと思った。しかしその日の日本人グループのデボーションでは皆辛そうだった。皆の気持ちはよく分かったし去年の自分を見ているかのようだった。皆が早く自分の力でこのキャンプの楽しさを見出すことができたらと思っていた。

●次は励ます立場で

大柴佳奈・武蔵野教会(12歳)

私は、このキャンプに行き、「辛さ」「苦しさ」「楽しさ」...いろんな事を味わった。でも、一番実感出来た事、それは、イエス様はいつもみんなの事を見守っていてくれるという事、その事を初めて心から考える事が出来た。またいつか、このキャンプに参加して、絶対みんなに会う!!そして、今度は励まされる方じゃなくて、励ます方として行きたい。

●多くの人の支えに感謝

山下七瀬・京都教会(16歳)

6人クルーの中に、日本人はたった一人という状況で言葉の壁を痛烈に感じました。初日、はりきってワークに取り組んだものの仕事はあまりなく、自分一人浮いているような孤独感を感じてしまいました。二日目、三日目と、ワークに行くのがどんどん不安になり孤独感は増していました。ワークサイトでデボーションのあとにレジデント(=修繕する家の住人)の人が「違う国の言葉が上手く話せないのは自然なことだ。気にすることはないよ。」と言ってくれ、そして、ハグして(=抱きしめて)くれました。本当に嬉しかったです。その後はクルーの人たちもたくさん喋りかけてくれて、やっとワークが楽しいと感じることが出来ました。その時私は、自分が孤独感を感じていたことを愚かなことだと思いました。私の周りにはクルーの人たち、日本人グループの人たち、スタッフの人たち、ホストファミリーの人たち、そして日本には家族や友達もいて、私のことをみんなが支えてくれているんだと身をもって感じましたし、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

<言葉の壁を越えるもの>

●笑顔のちから

牧野奉子・湯河原教会(15歳)

英語が自由に話せない自分の出来ることは、笑うことでした。笑顔は言葉ではないけれど人を良い気分させることが出来ると思ったからです。遠く日本から来て言葉が通じないのに楽しそうに笑っていて私たちも楽しい。大切なクルーのメンバーだよ。とも言ってもらえました。私は自分のクルーが大好きで、言葉が使えなくても、ワークが大変で疲れていてもクルーと一緒に居る時間が幸せでした。

●笑顔が素敵

石川恵美・田園調布教会(16歳)

私がアメリカに来て一番苦労したのが、「言葉の壁」でした。でも、その「言葉の壁」を越えられたのが、水曜日の夜プログラムでした。前の日に、私たち日本人は「マツケンサンバII」と「Shine Jesus shine」の審査を受け、みごと合格し、水曜の夜プロで発表しました。大成功でした。見ていた人も立って拍手してくれていたし、「Shine Jesus shine」の二回目は一緒に英語で歌ってくれました。その後のクルーでのデボーションの時に、リーダーが「二回目を一緒に歌ったけど、感動して涙が出てきた」と言ってくれました。そして、毎日リーダーが言ってくれた「笑顔が素敵」というのと、「恵美がここに居るから、皆が楽しく過ごせる」という言葉。これ聞いた時、「私の笑顔で皆を楽しませられる。」そして「私がここに居る事の大切さ」を教えられました。これからは笑顔を大切にしようと思います。そして堅信式を受けようと心に誓いました。

●ことばを超えて通じ合う世界

杉本洋一・田園調布教会牧師(引率)

日常使っている「ことば」が通じない世界は、参加者にとって大きな心のストレスになりました。一週間の温かく迎えられるホームステイの生活、そして同じように温かく迎えられているながら、ことばや文化の違いゆえに、壁を感じる一週間は、大変な落差を感じた時間だったと思います。この貴重な時間を通して、同じ神様につながる信仰を確認し、ことばを超えて通じ合う世界の体験を参加者はしました。ワークを通して「聖霊」は、私たちをつないでいてくださることを実感しました。キャンプのテーマは「内にあるものを外に出して生きる」でした。誰もなかなか、自分の中にある賜物を気づきません。でも、私たちに「神さまの恵みは十分に足りています」。参加者の人生の課題は、このキャンプを通して、確認されたことでしょう。

●私たちが結びつけてくださる神様

菊池 英・都南教会(15歳)

私は日本人同士の夜のデボーションで杉本先生が話して下さったお話を思い出すと少し元気になりました。そのお話とは「KING OF KINGS」の教会の人たちや、このキャンプに参加している人たちとは、言葉や文化も違う。だから自分の意思をはっきり伝えるに、十分なコミュニケーションを取れないかもしれない。でも、私たちに彼らがこんなに親切にしてくれたり、仲良くなれるのは私たちの間に神様という共通の方がいらっしゃるって、結びつけて下さっているからなんだよ」ということでした。私の心の中にあった「ただでさえ自分は見知りなのになんでクルーのメンバーとこんなにすぐ仲良くなれたのだろう?」「みんな嫌気かきしてもおかしくないのにどうしてこんなに親切にしてくれるのだろう?」という疑問や不安が「私たちは神様という共通の方を信じていて、神様が私たちをつないでくれるから」ということばで解消されたのと同時に、本当に神様の力が私たちにたらしているのだということ、いつも神様がついていてくださるのだということを実感できたからです。

<楽しかったこと・驚いたこと>

●人生で最も価値ある2週間

松浦稔・大岡山教会(19歳)

少しだけ…時間にしてたったの2週間、1年のうちで26分の1の時間、アメリカで生活する機会が与えられました。でもその2週間はけっして短かったわけではなく、むしろ今までの人生の中で一番価値のあった時間であったと思います。今まで知り合いだった人、このキャンプで初対面だった人を含めて教会のティーンズの仲間と2週間という長い時間ずっと一緒に過ごすことによって濃い友情を築き、自分のキリスト教信仰をさらに深いものにしたと思います。

●楽しい夜のプログラム

名嘉望実・小岩教会(13歳)

夜のプログラムがとてつもないのしかかった。とてもいんしょうにのこっているのは、最終日の日にやった、スターウォーズ・エピソードVの最後のシーンの言葉をかいた映像がとてつもない日本語ふきかえばんで見たいと思った。そのほかにも口では説明できないほどおもしろくてたのしかかった。

*望実君のお母様からも次のような便りをいただきました。

「私が無理に参加させたため、どのような顔をして帰ってくるのかとても心配をしていましたが、笑顔で帰ってきました。とても楽しかった様子で「あー、もう終わっちゃった。たのしかったな。来年も行くから! 次はとりあえず春キャンだね」と話していました。」(名嘉恵実子)

●恵まれた自然と環境

三輪彩華・玉名カトリック教会(15歳)

アメリカの生活環境のすごさには驚かされました。道路の周りにも、住宅地の周りにも緑がいっぱい! その緑の中には、リスや野うさぎ、スカンク、こうもりなど日本では動物園でしか見られないような動物が身近に共存しているのです。自然のめぐみにも触れることができました。私はとても素晴らしい時間を過ごすことができ、たくさんの人々に出会い、素敵な経験をする事ができました。もう二度と同じ経験はありません。この素晴らしい経験は私の一生の思い出です。

●広くて大きな世界

上野寛太郎・南小国教会(13歳)

皆で湖に行った。「おっさーい〜」「でかーい」皆すごく驚いていた。僕の住む熊本では見る事のできないすばらしい景色に感動した。それはもう日本で思う湖と違って海というような感じだ。日本では見る事の出来ない大きな自然の前で世界は広くて大きいとあらためて思った。

●日本とアメリカの違い

ケリー・リッチ・ナルミ ELCA短期宣教師(引率)

日本から15名の若者と3名の引率が7月26日にミシガンに到着した。彼らのカルチャーショックを目にして、自分が初めて日本に来たときのことを思い出した。15名の若者は、アメリカのものや匂いが日本と全然違うと言った。初めての日本で私も同じことを感じた。彼らは、アメリカで目にするものすべてが、大きい大きいと驚いていた。私が日本で感じたのはこれとは反対で、日本のものは皆なんて小さいんだろ、ということだった。





下川正人・市ヶ谷教会



大柴麻奈・武蔵野教会



上村知世・熊本教会



大和由祈・大岡山教会



木村日末子・西宮教会



大柴佳奈・武蔵野教会



小林恵理香・大岡山教会



山下七瀬・京都教会



<中央上>谷口真実・松本教会



牧野奉子・湯河原教会



グループ・ワークキャンプ2005 PHOTO ALBUM



石川恵美・田園調布教会



三輪彩華・玉名カトリック教会



杉本洋一・田園調布教会牧師



上野寛太郎・南小国教会



菊池 英・都南教会



<中央>ケリー・リッチ・ナルミ・短期宣教師



松浦稔・大岡山教会



ポール星崎・JELA職員



名嘉望実・小岩教会



海のように広いミシガン湖で

JELA+JELC共同プログラム グループ・ワークキャンプ2006 募集要項

以下の内容で十数名の参加者を募集します。

- 派遣期間: 7月25日(火)~8月8日(火)
- 内容: 米国ミシガン州でのホームステイと、同州Bay City Workcampへの参加



- 問合せ・申込用紙請求先:
日本福音ルーテル社団(JELA)
150-0013東京都渋谷区恵比寿1-20-26
電話: 03-3447-1521 / ファックス: 03-3447-1523 /
email: jela@jela.or.jp
*JELAは2004年に市ヶ谷から恵比寿に事務所を移転しましたので、ご注意ください。
- 選考方法:
2006年1月31日(火)以前にJELAに届いた申込用紙の中から、書類選考により派遣者を決定し、3月上旬ごろまでに本人に結果を連絡します。

*注意事項

- ①応募できるのは、2006年8月1日現在の年齢が14歳~20歳の方です。
*12歳から参加できるキャンプもありますが、今回のキャンプ地は14歳以上が対象です。
- ②キャンプは米国のグループ・ワークキャンプ財団が主催するキリスト教超教派の催しです。一つのキャンプ地には、様々なキリスト教団体のアメリカ人青少年とユースリーダーが400名前後集います。ルーテル教会の会員でない方もまたクリスチャンでない方も参加できます。
- ③日本から牧師ほか数名の男女の日本人成人が現地に行き、言語的側面と霊的側面から日本人参加者をサポートします。
- ④夏のキャンプですが、米国本部との連絡その他の準備の都合上、申込の受付期限を1月31日に設定してあります。

我が国における難民認定制度について



法務省入国管理局難民認定室庶務係長
落合 智昭

この度、法務省が難民問題に関する意見交換の場であるルーテル難民協力懇談会に参加していることから、同会の主催者である日本福音ルーテル社団のご依頼により、日本の難民認定制度について寄稿させて頂くことになりました。

執筆に当たり、過去に頂いた「JELA NEWS」を改めて読み返してみると、特に、私が寄稿することとなったスペースには、各団体において難民支援等にご尽力されている方々の活動内容が掲載され、そのどれもがご自分の担当する分野についての熱い思いを真摯に語るもので、とてもすばらしい記事でした。私としては、このような光栄な機会を与えてくださったことに感謝すると共に、「JELA NEWS」の読者の方々に、我が国の難民行政について少しでもご理解して頂けたらと思ひ寄稿する次第です。

1 法制定経緯等

我が国における出入国管理は、すべての人の出入国の公正な管理を図ることを目的として1951年(昭和26年)に制定公布された「出入国管理令」に基づいて運用されていました。

一方、我が国の「難民の地位に関する条約」及び「難民の地位に関する議定書」への加入に伴う国内法整備の一環として、1981年(昭和56年)6月5日、「難民の地位に関する条約等への加入に伴う出入国管理令その他関係

法律の整備に関する法律」により「出入国管理令」の一部改正が行われ、難民認定手続が規定されたことから、法律名も「出入国管理及び難民認定法」と改められました。

以来、約20余年、皆様ご承知のように難民問題は依然として国際社会において重大な関心事項であり、国際交流が活発化するにつれて海外での情勢変化が我が国の社会に直接影響を及ぼすようになり、その結果、本邦内で難民認定申請する者の顕著な増加や事案の複雑化を招くようになりました。我が国としては、これらの状況に適切に対応するために難民認定制度を見直すこととし、仮滞在許可制度の創設や不服申立制度の見直しを含む「出入国管理及び難民認定法の一部を改正する法律」(以下「改正入管法」という。)を2004年(平成16年)6月2日に公布し、同法は本年5月16日から施行されております。

2 新しい難民認定制度

主な改正点は、

(1) 仮滞在許可制度の創設

不法滞在者である難民認定申請中の者の法的地位の安定化を図るために一定の条件に合致した者に対する仮滞在許可制度を創設し、仮滞在の許可を受けた者については退去強制手続を停止し、難民認定手続を先行して行うこととした。

(2) 難民として認定された者等の法的地位の安定化

難民と認定された者で、一定の要件を満たす場合には、一律に在留を認めることとし、その者の法的地位の安定化を早期に図ることとした。

(3) 不服申立制度の見直し

手続の公正性・中立性をより高める観点から、第三者を不服申立の審査手続に関与させる難民審査参与員制度を設けた。

ことなどです。

改正点の詳細については、紙面の関係から

割愛致しますが、今後、我が国としては、難民認定制度が改正された経緯を踏まえて、より公正な手続によって難民の適切かつ迅速な保護を図るよう引き続き努力していきたいと思ひます。

3 難民支援に携わる方々との協力

難民認定行政を担当する法務省入国管理局は、外務省等他の政府機関と協力し、難民の適切な保護や難民支援体制の整備に努めなければならないことは言うまでもありません。また、難民として認定すべきものは速やかに難民として認定するという姿勢に変わりはありません。しかしながら、より良い難民支援体制の確立のためには、幅広い知識や豊富な経験を有したNGOの方々との協力は必要不可欠なものであります。

今回、「JELA NEWS」に寄稿するきっかけとなりましたルーテル難民協力懇談会は、来年50回目の開催を迎えると聞いておりますが、私自身同懇談会に参加し、出席された皆さんが難民問題について真剣に語り合う姿を見て、同懇談会が長く続いている理由が分かったような気がしました。同懇談会で議論されたことがやがて実を結び、山積する難民問題が少しでも解決することを願ってやみません。

書籍紹介

『ほんのすこしの勇気から — 難民のオレアちゃんがおしえてくれたこと —』(求龍堂)

7月に日本国連HCR協会ボランティア・絵本プロジェクトチームが難民に関する本を刊行しました。オールカラー42点のかわいい図版とやさしいことばで書かれてあり、小学生でも読める内容です。難民問題について理解を深め、自分にできることは何かを考えるために絶好の一冊です。全96頁。難民についてのQ&Aつき。定価千円。印税のすべては日本国連HCR協会に寄付され、難民援助活動に使われます。



ジェラハウス利用者からの感謝状

長らくジェラハウスにいた難民申請者Peter Bran Saingさんが、特別在留許可という日本滞在資格を得て、都内のアパートで自立生活を始めることになりました。ピーターさんはミャンマー出身です。ラングーン大学で数学と法律を修め、中学で英語と数学を教えていました。しかし、カチン独立機構という政治組織の一員として働いたことや、ミャンマー軍事政権に反対する地下活動に加わったことなどから迫害の危険が身に迫り、妻子を残して日本に逃れてきました。

ジェラハウス退出前にJELA事務室を訪れたピーターさんから、次のような感謝の言葉(原文英文)を受け取りましたのでご紹介します。

私はミャンマーで教師をしていました。教えることが好きです。それは花に養分を与えて、きれいに咲かせ、新鮮な香りを引き出すのに似た

行為です。

私は2001年に日本に来て、人生を一からやりなおすことになりました。わからないことだらけでしたし、あちらこちらと、何回も住むところを変えなければなりませんでした。

ジェラハウスには2年以上お世話になりました。この家に来て、「泣きながら夜を過ごす人にも、喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる」という旧約聖書・詩篇の言葉の意味がわかりました。私の身にそれが起こったからです。ジェラハウスに住んでいるあいだ、私はたくさんの良いこと、多くの祝福をもらいました。金や銀を得るよりも、ジェラハウスに迎えられたことは、ずっとずっと素晴らしいことでした。いま私は落ち着いて、日本や本国にいる仲間のために働いています。日本にいるカチン族の仲間が助けを必要としているときは、いつも手を差し伸べています。

私の信条は、与えなさい、そうすれば与えられ

る、許しなさい、そうすれば許される、助けなさい、そうすれば助けられる、ということです。

私たち難民は日本では漂流者であり、いつか本国に帰る存在です。しかし、ジェラハウスに住まわせてもらったことで、漂流者だと思いは消えました。神様ありがとうございます。神様はほんとうに真実で、どこまでも恵み深いお方です。

大いなる感謝をこめて

ピーター



ピーターさん(左)と森川職員

30名の大学生・社会人がジェラ・ミッションセンターを訪問

8月4日(木)の午後、アジア福祉教育財団・難民事業本部(RHQ)主催のスタディ・ツアーの一行が、ジェラ・ミッションセンターを訪問しました。「難民支援団体を訪問し、難民支援に関する現場の声を聞くことにより、学生・市民等に対して広く難民問題についての理解を促進し、難民支援に関わるボランティアを育成す

ること」を目的とするこの企画は、5年前から毎年実施されていて、先着30名の学生・社会人・NGOボランティア等の方が主要な難民関連組織を訪問するというものです。参加者のほとんどは大学生ですが、関東エリアだけでなく、東海・近畿・四国からも自費で参加するという熱の入りようです。今年はJELAのほか、海外で

救援センターの5箇所が訪問先に選ばれました。

JELAからはグリテバック事務局長と森川職員が対応にあたり、JELAの沿革、事業目標、個々の事業の紹介および難民支援事業の詳細を説明し、質問に応じました。後半の事務所見学では、ポスター作成やビデオ編集のためのメディア制作室に関心が集まり、いあわせた中川理事が機器や制作手順を説明すると、参加者はメモをとりながら熱心に耳を傾けていました。

予定の1時間半があつという間に過ぎ、一行は急ぎ足で次の訪問地に向かいました。将来NGO関連の集まりで顔を合わせる人がこの中から多数出てくるのを楽しみにしています。



参加者を前にJELAのビジョンを語るグリテバック事務局長



中川理事(右端)からビデオ編集作業の説明を受ける参加者

支援者の皆様へ



救い主イエスの御名により、ご挨拶申し上げます。

2005年もJELAは充実した働きを展開することができました。これもひとえに皆様のご支援のおかげと感謝しています。JELAはまもなく法人設立100周年を迎えます。これからも変わらぬご支援をよろしく申し上げます。

JELAは2004年11月に恵比寿に事務所を移転し、今までより広いスペースを与えられ、職員も増員することができました。新しいビルの1階ホールは、自分たちや他の公益団体の催しのために用いています。この新事務所とホールが、社会に手を差し伸べる私たちの働きの推進に役立つことを願っています。

2005年の中心となる働きは、JELCとの共同プログラムです。両団体が協力して企画するこのプログラムは、日本の教会の成長と、JELAの社会に向けた公益活動に貢献するためのものです。リーダーの養成、青少年のボランティア派遣、キリスト教的な教育がプログラムの要であり、将来にわたり両者が協力して働きを進めていけることを願っています。

このような各種プログラムへの支援と共に、新しく設けました賛助会員制度にも加わっていただくと大変ありがたいです。現在百数十名の方が会員になってくださっていますが、団体としてより安定した運営ができるように、さらに多くの方が長期にわたって会員になってくださることを願っています。

JELCその他の支援者の皆様のご協力と、神様の愛にあふれたお導きにより、JELAは社会に向けた働きを喜びをもって、積極的に進めていくことができます。これからも神様が私たちみんなの働きを祝福してくださるようにお祈りいたします。

JELA事務局長
ローウェル・グリテバック

<賛助会費>

赤間峰子/アクストン・ケビン/アクストンともこ/明比輝代彦/阿部晴夫/尾嶋治/阿波田絹子/アルブレクト・オスカー/アルブレクト・リネット/安藤淑子/石井千賀子/石澤とし子/石田浩子/今井哲男/岩崎高紀/岩本保子/宇五十鈴/ヴァンデルタング・エリ子/ウォータマン・ジュリー/ウォータマン・チャールズ/上村理恵/江崎啓子/江澤妙子/大原英子/乙守ミチ子/榎木明子/榎木芳昭/加瀬治/勝原洋子/加藤裕子/加藤久子/加藤美枝子/狩野敏子/上窪松子/川口武宣/川口文子/木村猛/木村富久子/京谷信代/窪田銆子/倉重ミドリ/古財克成/小坂敦子/後藤佳代子/小宮俊作/小宮武子/坂本照光/坂本陽子/佐々木裕子/猿渡公平/三五康子/芝田美穂子/島宗正見/清水蒼至子/下関教会シャローム会/周田裕芳/白川清/白髭市郎/尻無浜紀美子/菅正康/関口佳子/関本憲宏/園山繁造/園山道子/高橋要子/高橋佳子/竹越英子/竹内貞夫/田中善一/田中美希/田中美紗子/谷口恭教/堤重敏/都南教会/共に生きる集い/鳥飼勝隆・豊子/中島愛/中島康二/中島千麻子/ニアフッド・マイケル/ニアフッド昌子/西山昭子/ネルソン・アイリーン/ネルソン・クレイグ/ネルソン・デビッド/パーソン奈穂子/橋口栄子/橋口保夫/長谷川美恵子/初瀬正昭/早瀬康平/原田恵美/日野原万記/兵藤真理子/平林洋子/フォーサイス・ポール/福田陽子/宝珠山幸郎/細山千恵子/益永和代/マッケンジー麻里/松比平聡夫/丸山正昭/満田奏子/南節子/宮澤真理子/三輪律子/迎恒夫/迎千栄子/森涼子/森川キャロリン/森田雅子/山口実香/山口美子/山崎恵美子/山田薫/山本了/ロード・エリザベス/若原奇美子/渡辺映子/その他匿名数名

お知らせ



2006年度「研修講座」募集始まる

いよいよ2006年度リラ・プレカリア研修講座の募集が始まりました。主な募集要項は以下の通りです。

- I 開講期間:
2006年4月13日から2007年9月末までの18ヶ月間
- II 募集人数: 最高8名まで
- III 応募資格:
全期間の研修に専心し、自らのハープを用意できる方
年齢による制限、宗教による制限はありません。
- IV 研修費用:
合計50万円(入学金5万円、受講料45万円)
ハープの購入費、研修中の交通費、教材費は別途必要
JELAの奨学金による受講料の一部補助も可能

忘れ物のお知らせ
東京・恵比寿のジェラ・ミッションセンター・ホールで5月に開催した、クリスティーナ・トゥーリンさんのハープコンサートで忘れ物がありました。薄手の女性用のカーディガン(白色)です。JELA事務所でお預かりしていますので、お心あたりの方はお申し出下さい。

ニュースレター等への氏名の掲載と個人情報の取り扱いについて

献金によってJELAの働きを支えてくださる皆様のお名前を、これまでご本人にお断りせず本誌に掲載してまいりました。今後、「支援者一覧」において匿名を希望される場合は、その旨をJELA事務局までお知らせください。次回分(2006年4月発行予定)からそのようにいたします。ご連絡がない場合は、お名前の掲載をご承諾いただいたものと判断いたしますので、どうぞご理解ください。なお、世界の子ども支援チャリティコンサート等で頂戴する皆様の個人情報は、ニュースレター等でJELAからご連絡をさし上げる場合以外に無断で使用したり、外部のものに見せることはありませんので、ご安心ください。

編集後記
「心の宝物」という題で新聞にこんな文章が載っていました。「……彼女(=ホームステイしている中国人留学生)が来てまもなく、家の近くの公園まで散歩したときのこと。住宅地で目にしたホームセキュリティのシールの意味を質問され、私が『お金持ちが張っている』と話すと、夫が『我が家は、宝物もお金もないから張っていない』と言った。すると彼女は立ち止まって私たちを真剣な目で見ながら、『お父さん! 一番大切な宝物、お母さんがいるでしょう!』と言いつつ。夫は驚き、私は思わず拍手してしまった……。夏に米国のワークキャンプに参加した青少年たちも、たかさんの「心の宝物」とともに帰国しました。読者のみなさんの「心の宝物」は何でしょう。(M)

<各プログラム支援献金>

阿島一夫/尾嶋治/石井千賀子/石澤とし子/石田浩子/ヴァンデルタング・エリ子/上原文子/江崎啓子/太田立男/大中真理/柿沢純江/加藤悦子/加藤久子/加藤美枝子/上窪松子/来嶋紀美子/京谷信代/清田純次/釧路教会/桑井登志恵/倉重ミドリ/古財克成/小坂敦子/児島和子/小宮俊作・武子/志田俊郎/清水蒼至子/霜尾閑子/周田裕芳/白川清/尻無浜紀美子/鈴木やす子/関本憲宏/園山繁造・道子/高津和子/高橋寿子/武田良二・歌子/田中栄子/谷川陽子/玉名教会/栢植ハル/東郷優子/鳥居和代/鳥飼勝隆・豊子/中井奈津子/中村雍子/芳賀直哉・美江/早瀬康平/原田恵美/ハルボーセン美智代/平林洋子/福田陽子/淵田康穂/細山千恵子/堀元子/益永篤/マリア/南節子/三穂野伏美/毛利庄蔵/森保宏/八坂由貴子/山泉順子/山口孝子/山口実香/若原奇美子/渡辺高伸/渡辺聡/Cunningham, Robert/Gilbert, Donald/Kleven, Mae/Mischke, Janet/その他匿名数名

以上、敬称略。
ご協力ありがとうございました。

*阿島一夫様、周田裕芳様へ: 払込取扱票ご記入の住所に郵便物を送ると配達不能で戻ってきます。もう一度ご連絡先をお知らせいただければ幸いです。

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association
日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel. 03-3447-1521 Fax. 03-3447-1523 Jela@jela.or.jp www.jela.or.jp
口座番号 00140-0-669206 加入者名 日本福音ルーテル社団